大学生における迷信的しつけの経験と道徳的判断タイプとの関連

○首藤敏元¹・利根川智子²・樟本千里³ (非会員)・上岡紀美⁴ (非会員)

(¹埼玉大学・²東北福祉大学・³岡山県立大学・⁴仙台白百合女子大学)

キーワード: 迷信的しつけ, 道徳的判断, 社会的領域理論, 大学生

University students' experience of superstitious discipline and their characteristics of moral judgment

Toshimoto SHUTO¹, Tomoko TONEGAWA², Chisato KUSUMOTO³, # and Kimi UEOKA⁴, #

(¹Saitama University, ²Tohoku Fukushi University, ³Okayama Prefectural University, ⁴Sendai Shirayuri Women's College)

Key Words: superstitious discipline, moral judgments, social domain theory, university student

目 的

社会的行動の判断は道徳(moral)、慣習(convention)、個人(personal)といった複数の領域概念が調整された産物である。3種類の質の異なる概念は幼児期から発達することが示されているが、同時に場面の違いを超えて過剰に抑制的な判断をするタイプと、逆に個人の自由を拡張させて判断するタイプの存在も明らかになっている(Kusumoto et al., 2018; 首藤・二宮, 2014)。Turiel (1983)は、「ご挨拶をしないとお母さん悲しい」のように慣習的な行為に道徳的な要素を付随させるしつけは領域調整を阻害させると指摘する。わが国には、子どもに不安感をもたせることで大人の期待や社会的規則に様に追従させようとする迷信的なしつけ言葉が多数存在する。本研究は、大学生を対象にして、迷信的なしつけを受けてきた経験と現在の道徳的判断との関係を検討することを目的とする。

方 法

A 研究参加者

首都圏の3つの大学に通う学生380名(男女同数, 平均年齢19.6歳)が調査に協力した。

B 質問項目

(1)迷信的しつけ言葉

『「ご飯を残すと目がつぶれる」など、しつけ場面で使われる戒めの言葉』と定義し、村石・安見・関口(1996)の研究を参考にして、13種類(例「嘘をつくとき舌を抜かれる」「夜に爪を切ると親の死に目にあえない」等)を設定した。参加者はそれぞれについて「幼少時代に周囲の大人から言われた程度」を4段階(1.全く記憶にない, 2.言われた覚えはある, 3.時々言われた, 4.よく言われた)で回答した。また、「今の生活に影響している程度」について5段階(0.全く記憶にない, 1.ほとんど残っていない, 2.今でもたまに意識する, 3.今でも時々意識することがある, 4.現在の生活に定着している)で回答した。

(2)道徳的判断

「親の財布から黙ってお金を取る」「目上の人に若者言葉で話す」「家の敷居を踏んで歩く」など、他者や集団に危害を与える行為、不親切な行為、因習違反行為、公衆道徳違反、自己の心身を害する行為のカテゴリーから合計25項目が作成された。参加者はそれぞれの行為の善悪について「1.自分の好きなようにしてもよい」から「4.絶対にしてはならない」までの4件法で回答した。

D 手続き・倫理的配慮

質問票は無記名であり、授業の中で配布され、実施後、回収された。参加者には回答は任意であること、どの時点でも回答を中止できること、授業の成績・出席とは関係しないことが強調された。回収率は82.5%であった。

結 果

A 迷信的しつけの経験

項目ごとに「言われた程度」の回答に「生活に影響している程度」の回答を乗じた得点(0~16点)を算出した。この得点は迷信的しつけを受けた経験だけでなく、しつけ言葉が現在の生活行動への統制力を持つ程度も表している。上位3項目は、「ご飯を食べてすぐ寝ると牛になる」($M=6.55$, $SD=5.44$)、「一円を笑う者は一円に泣く」($M=5.25$, $SD=4.83$)、「夜口笛を吹くとヘビが出る」($M=4.84$, $SD=5.46$)であった。これらの合計得点を迷信的しつけ経験得点(0~208点)とした($\alpha=.87$)。性差は有意ではなかった(男性 $M=38.94$, $SD=33.55$; 女性 $M=45.14$, $SD=37.84$)。

B 道徳的判断タイプ

25項目の判断得点を因子分析(主因子法, 斜交回転)した結果, 2因子が抽出された。因子1には規則違反と自愛のなさに関連した項目の負荷量が高く, 因子2には反社会的項目の負荷量が高かった。因子1は状況に応じて判断の変わらざる慣習/自己管理領域, 因子2は直接的に他者へ悪影響をもたらす道徳領域の認知を反映していると解釈される。2つの因子得点をK-Means法によるクラスター分析にかけたところ, 3つのクラスターが見出された。クラスター1($N=180$)は両因子の得点が高く, 過剰抑制を示す型, クラスター2($N=98$)は両因子の得点が低い統制不全(自由肥大)型, クラスター3($N=102$)は慣習/自己管理領域では自由感が強く, 道徳領域では抑制的になるといった領域対応型であると定義された。男性には統制不全型が多く, 女性には過剰抑制型と領域対応型が多かった($\chi^2(2, N=380)=29.12$, $p<.001$)。

C 道徳的判断タイプと迷信的しつけ経験との関連

迷信的しつけ経験得点について, 2(性)×3(道徳的判断タイプ)の分散分析を行った結果, 道徳的判断タイプの主効果のみ有意となった($F_{(2, 374)}=3.78$, $p<.05$, $\eta^2=.02$)。迷信的しつけ経験得点は抑制過剰型($M=47.86$)が最も高く, 次に領域対応型($M=39.37$), そして統制不全型($M=34.12$)であった。

考 察

道徳的な逸脱場面だけでなく, 慣習的および自己管理上の違反に対しても自己抑制的になる大学生は, 相対的に, 迷信的しつけ経験を強く持っていた。この結果は, 幼少期のしつけであっても, 規則や大人の期待に様に従わせようとするしつけ言葉の影響が長期間続くことを示唆している。迷信的なしつけは領域調整を不活性化させる文化的な要因であることが考えられる。

引用文献

- Kusumoto, C., Ueoka, K., Tonegawa, T., & Shuto, T. (2018). *Characteristics and psychological consequences of Japanese adolescents' personal autonomy*. Paper presented at the 126th APA Annual Convention
- 村石昭三・安見克夫・関口準(1996). 幼児に対する「しつけ言葉」の研究 東京家政大学紀要, 36(1), 121-130.
- 首藤 敏元・二宮 克美 (2014). 子どもの道徳的発達の文脈としての母親の「個人の自律性」概念発達心理学研究, 25, 356-366.
- Turiel, E. (1983). *The development of Social Knowledge: Morality and convention*. New York: Cambridge University Press.
- 本研究の一部は科研費 JP17H02629 の助成による。